見る 知る 歩く
ジオなまち
ながのはら

長野原町に伝わる 小正月のツクリモノ

［ 長野原町の小正月行事 ］

vol.09

今年もまもなく年の瀬、もういくつ寝ると…
お正月がやって来ます。
今回ご紹介するのは、長野原町に伝わる小正月のツクリモノです。
小正月は「農の正月」「百姓の正月」と言われ、元日を含む大正月よりも大切なものとされてきました。
小正月に向けて、各家庭では様々なツクリモノが作られ、神仏にお供えすることで、一年の豊作や家内安全を願いました。
長野原町のツクリモノは、種類の豊富さをはじめ、ここにしかない独自のものもあり、その素朴な手仕事からは、農を中心としたかつての人々の温かな暮らしぶりが見えてきます。

ツクリモノに込めた豊作への願い

小正月のツクリモノの準備は、「山入り」から始まります。初山入りの日は一般に1月2日とされ、この日に山に入り、ツクリモノに使うヌルデ（オッカド）やコメゴメ、マユダマをさすボクなどの木を切ってきます。

ツクリモノを作る日のことを「ノウビ」（農の日）といいます。一般には11～13日にかけてと言われますが、14日の「お飾りかえ」に間に合うように各々の家庭で決めていたようです。お飾りかえの日には、正月の松飾りやお供え物を外し、マユダマを飾り、それぞれのツクリモノを決められた神仏にお供えします。

ホダレはゲズリバナともいい、コメゴメの木をホダレナタという刃物で削り、薄くくるくると縮れたハナという飾りを作ったもの。実った稲の穂が垂れた姿を表していると言われ、造形的に見ても美しく手がこんでいます。

柔らかく細工しやすいヌルデを使って、様々なものが作られます。粟や稗の穂に見立てたアワボ・ヒエボ。それぞれの俵に見立て釜神様に供えるタワラやタワラ木。今で言えばミニチュアのように可愛らしい農道具の模型一式。15日の朝に炊く小豆粥（十五日粥）を実際にかきまわしたり食べたりするためのカユカキ棒にハラミ箸。特に、木像の道祖神を作り、どんどん焼きで焚きあげたり地域の石造道祖神にお供えしたりする風習は、県内でも吾妻郡内のみに伝わる珍しい小正月行事なのです。

そして、木像道祖神と並び、この地域特有とされるツクリモノのひとつに、郷土玩具としても知られる「キジ車」があります。このキジ車について、次頁で詳しくご紹介しましょう。

おもなツクリモノのご紹介

ホダレ

コメゴメの枝をホダレナタ（ホダレカキともいう）という小さな刃物で削ってハナを作ったもの。ケズリバナともいい、豊穣への願いが込められたものと言われている。1段ホダレは何十本か作り、家の内外の神仏に供えたり、お松杭や墓地などにも上げられる。2本の木に8段ずつハナを作り、水引で結ぶ十六ホダレは神棚に横にして上げることが多い。

タワラ・タワラ木

ヌルデの太い木を適当な長さに切り揃え、皮をむいたものとむかないものを数本ずつ作り、それぞれをまとめて3ヶ所しばり、俵の形にする。俵は米俵やアワ・ヒエ俵を表し、釜神様に供えるため、台所の梁につるしたり、かまどの脇などに置く。乾燥した木は、その後一年中の祝い事の際に燃す祝い木となる。

農道具

ヌルデの木を細工して農具の模型を作り、釜神様に供える。エンガ（柄鍬・鋳鍬）、テンガ（手鍬・鍬）、マンガ（馬鍬）から、杵、臼、背負子、梯子まで、その種類は様々。実際に農道具は作らずに目録だけですませる家もある。

木像道祖神

ヌルデの木で男女2体の道祖神を作り、豊作や夫婦和合、家内安全などを祈るものと考えられる。顔や着物を描いたものから、「奉納道祖神」などと文字だけのものもある。主にどんどん焼きで燃やされたりするが、一体は石造道祖神に供えたりするなど、地区によって使い方が異なる。

アワボ・ヒエボ（アーボヒーボ）

15cmほどに切り揃えたヌルデの枝の、皮をむいたものをアワボ、皮をむかないものをヒエボといい、アワ（粟）やヒエ（稗）の穂が実った状態を表している。それぞれ8本ずつ計16本（地区により本数は異なる）、笹竹の枝や青竹を細かく割った先にさして、堆肥場に立てる。

カユカキ棒・ハラミ箸

カユカキ棒とは、ヌルデの木を杭状に加工したもので、15日の朝に小豆粥をかき回すのに用いる。豊凶の占いにも使われ、棒についた粥が多いとその年は豊作になるとされる。炊きあがった粥は、稲の穂がはらんだ形の箸（ハラミ箸）で食べる。このとき、熱いからと息を吹きかけて食べると、田植えの時に大風が吹くといい、禁じられている。箸は家族分のほかに1本余分に神様の分を用意した。

マユダマ（繭玉）

ヒエ、トウモロコシ、米などの粉をこねてマユの形にした団子。養蚕のさかんだった群馬県下で多く見られ、ヤマクワなどの枝につけて飾り、豊蚕を願って蚕神に供える。十六マユダマをいって、十六個のマユダマを木の枝に付けることが多い。飾り終えると、どんどん焼きで焼いて食べる。

全国的にも珍しい郷土玩具「キジ車」

その他のツクリモノ同様、今では作るひとも数少なくなってしまったキジ車。現在でも毎年、小正月にはキジ車を作られていると聞き、貝瀬の佐藤甲子さんのお宅を訪ねてみることに。佐藤さんの家の神棚の脇には、これまでに作ったキジ車が並べられています。

佐藤さんがキジ車を作るようになったのは20年ほど前から。生前のお父さんが作っていたのを思い出しながら、見よう見まねでやってみたそうです。「親父が生きていた頃はわざわざ教えてもらったりしなかったからね。ただ小さい頃には作ってもらったもので遊んだりはしましたよ。」

キジ車は、ヌルデの木の反った部分をうまく生かして胴体を削り出し、車輪を取り付けて、転がせるように仕上げます。最近は、ヌルデの木が少なくなったため、枝ぶりのよい部分を探すのが難しくなってしまったそう。作り方は人それぞれですが、佐藤さんは丸太を台にして、縦に木を置き、上から下に体重をかけながら鉈でザクザクと荒削りしていきます。難しいのは顔の周りの部分。「顔つきを考えながら輪郭を彫って、目をいれる。毎年やってもなかなか思ったようにはできないねえ」とおっしゃいますが、佐藤さんの作るキジ車には、大きくつぶらな瞳や小首をかしげたような顔つきなど、独特の可愛らしさがあります。

どうして小正月にキジ車が作られるようになったのか。はっきりしたことはわかっていませんが、キジは姿・色彩もよく、食味にも優れているため、狩猟の対象として人々の生活と深いつながりがありました。また、古くから吉鳥として結婚式の料理に使われるなど、夫婦愛の象徴や子育てのシンボルとして親しまれています。そのことから、一年の始まりに、身の回りのもので玩具を作り、子供の健やかな成長を願う縁起物として定着していったのではないでしょうか。

小正月のツクリモノは、工芸品として長年保管するものではなく、毎年時期が過ぎれば燃やしたり作り直していくものであるため、現存しているものは多くはありません。それだけに、若い世代のなかにはその存在を知らない人も多いのではないかと思います。

これを機に、来月の小正月を前に、地域や家庭に伝わるツクリモノについて、身の回りの方に話を聞いてみてはいかがでしょうか。

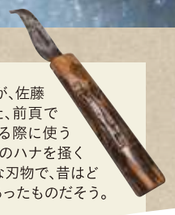
◎今回調べたのは…

長野原町に伝わる小正月のツクリモノ

「長野原町の民俗」〈八ッ場ダム水没地域民俗文化財調査報告書〉（長野原町／1987年発行）
「上州の暮らし民具」（塩崎昇／読売新聞前橋支局／昭和52年発行）

木の木目や特徴を生かし、ざっくりと仕上げる長野原のキジ車。最後に首に紐をかけ、子供が引っ張って遊べるようにする。着色はせず、人にとって目は描き入れないことも多い。「ひとつとして同じものがないのがいい」と佐藤さん。「昔は他にオモチャなんてなかったからね。特に男の子がいる家ではよく作られていましたよ。」

「キジ車」のつくり方



キジ車とは関係ないが、佐藤さんに見せてもらった、前頁で紹介したホダレを作る際に使う「ホダレナタ」。ホダレのハナを掻くためだけに使う小さな刃物で、昔はどこの家にもひとつはあったものだそう。

実演のため、本来の時期より早くヌルデの木を切り出してきてくれた佐藤さん。時期が早いと虫が入りやすいため、木を切るのはやはり年明けもしくは年末が良いのだそう。キジ車の大きさは一般に30cmほど。鉈で荒削りをしたあと、カンナを使い仕上げていく。半日もあれば一体は作れるとのこと。

キジ車の不思議

なぜ九州と吾妻に？

キジ車といえば、九州の郷土玩具として福岡や熊本などで作られるものがよく知られています。今のところ、キジ車の存在が確認されているのは、九州と、ここ群馬県の吾妻郡だけ。遠く離れた2つの場所を繋ぐ手掛りは特に見当たっておらず、不思議な偶然なのでしょうか。

どんどん焼きの火を乗せて？

長野原町大津には「どんどん焼きの時に子供がキジ車を引っ張っていき、火を背中につけて家へ持ち帰った」という話や、吾妻町の岩下では「燃えさしをキジ車に縛り付けて帰り、屋根に放り上げて火伏せをした」という話もあり、キジ車が単なる玩具ではなく、まじないとしての役割を担っていたことも見えて来ます。

見る 知る 歩く
ジオなまち
ながのはら

ふるさと再発見

[9]

—文化財だより—

家族で越冬 愛らしい幼鳥のしぐさ 応桑用水池の冬鳥【コハクチョウ】

応桑用水池は、西中学校の校庭の西にある配水池です。毎年12月から2月頃までコハクチョウが来てくれています。人々の関心はもっぱら飛来数に集中し、数の増減が話題になることが多いです。ちなみに今年は40羽でした。

確かに沢山来てくれることは長野原町の誇りになりますが、実はここ応桑池は幼鳥を間近で確認できる所でもあるのです。幼鳥といえどもシベリアからここまで飛んで来られたのですから、大きさは親くらいあります。しかしまだ一人前ではなく、親としてはできるだけよい場所で子育てをしたいはず。そして応桑池を選んでくれたということは、ここの人々をも含めた地域を信頼していることに他なりません。このことこそ長野原町の本当の誇りといえるでしょう。

よく見ると幼鳥は見分けられます。まず体の色が黒っぽい。くちばしにピンク色が残る。何よりも側にいる親鳥に甘えつき、頭をかいてもらったりしている姿は最高です。

次号は**【湯かけ祭り】**をご紹介します。